

平成19年度第1回対馬暖流系アジ・サバ・イワシ長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
西海区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通しのポイント (海況:2007年10月～2008年3月、漁況:2007年11月～2008年3月)

海況

- (1) 薩南海域における黒潮北縁域の位置は、「屋久島南付近での変動」で経過する。
- (2) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表層水温は、「平年並み～やや高め」で経過する。

※ 引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温の高低の程度は以下のとおり。

「やや」 : 約3年に1回程度の出現確率

「平年並み」 : 約2年に1回程度の出現確率

漁況 (来遊水準)

- (1) マアジは前年を下回る。
- (2) マサバは前年並み。
- (3) ゴマサバは前年を下回る。
- (4) マイワシは前年・平年を上回る。
- (5) ウルメイワシは前年・平年を上回る。
- (6) カタクチイワシは前年並みで、平年を上回る。

※ 「前年」は2006年11月～2007年3月。「平年」は過去5年(2002～2006年)の平均値。

問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課 沿岸資源班

担当: 大隈、田中、佐藤

電話: 03-3502-8111(内線6800)、直通電話: 03-6744-2377、ファックス: 03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/>

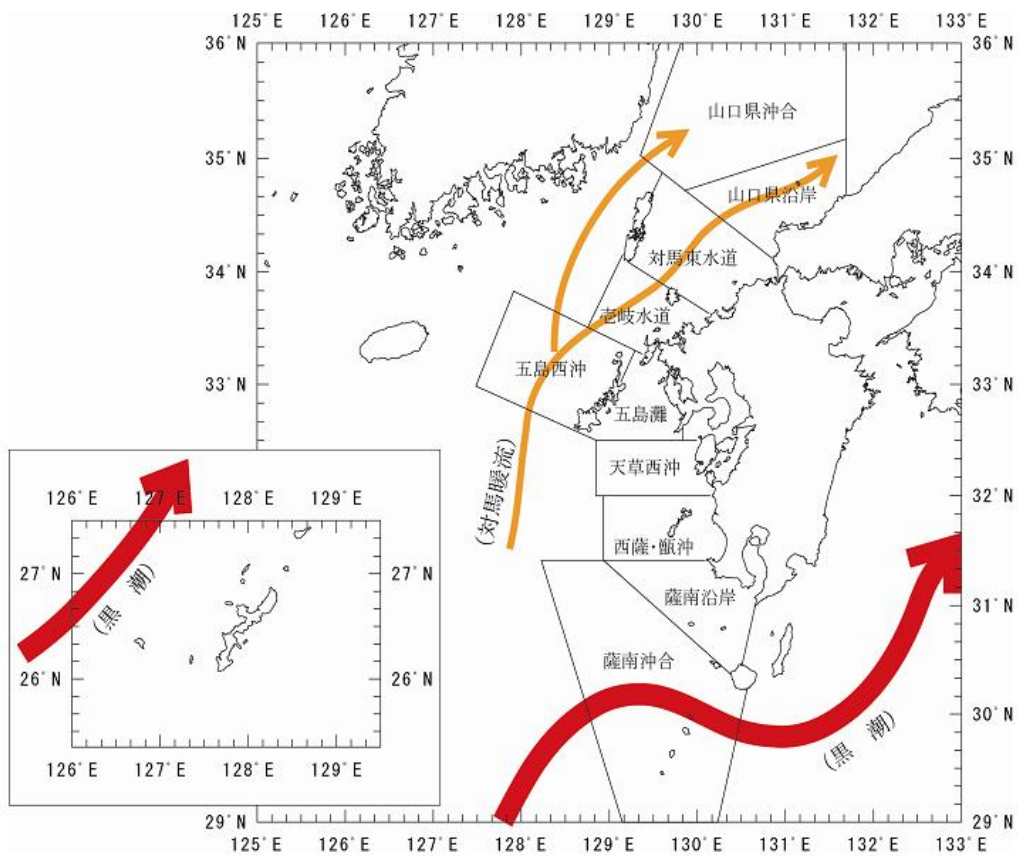
独立行政法人水産総合研究センター 西海区水産研究所 業務推進部

電話: 095-860-1600、ファックス: 095-850-7767

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://snf.fra.affrc.go.jp/>



予報対象海域

海況予報

1. 今後の見通し（2007年10月～2008年3月）

（1）海流

薩南海域における黒潮北縁域の位置は、11月には「接岸傾向」となるが、全般的には「屋久島南付近での変動」で経過する。

（2）表層水温

山口県沿岸・沖合、対馬東水道、壱岐水道、五島西沖、五島灘、天草西沖、西薩・甌沖、薩南沿岸、黒潮域、沖縄島周辺海域、大陸棚上では、前半、後半ともに「平年並み～やや高め」で経過する。

2. 経過（2007年4月～9月）

1. 大陸棚上

（1）海面水温

北部：4～7月「平年並み」、8・9月「かなり高め」。

南部：4～7月「平年並み」、8・9月「やや高め」。

2. 黒潮流域

（1）海流

沖縄北西方の黒潮の流路は、春季、夏季ともに平年並み。流量は、春季は平年より多め、夏季は少なめで経過。

薩南海域における黒潮北縁域は、5月は「接岸傾向」、他の月は「屋久島南付近での変動」で経過。

（2）海面水温

4～7月「平年並み」、8月「やや高め」、9月「平年並み」。

3. 対馬暖流域・沿岸域

（1）表層水温

山口県沖合：4月「やや高め」、5月「平年並み」、6・8月「やや高め」、9月「平年並み」。

山口県沿岸：4月「かなり高め」、5月「はなはだ高め」、6・8・9月「やや高め」。

対馬東水道：4月「はなはだ高め」、5月「やや高め」、6月「平年並み」、7月「やや高め」、8月「平年並み」、9月「かなり高め」。

壱岐水道：4月「かなり高め」、6月「やや低め」、8月「平年並み」。

五島西沖：4月「はなはだ高め」、6月「やや高め」、8月「平年並み」。

五島灘：4月「はなはだ高め」、6月「平年並み」、8月「やや低め」。

天草西沖：4月「やや高め」、5・6・8月「平年並み」。

西薩・甌沖：4月「やや高め」、5・8月「平年並み」。

薩南沿岸：4・5月「平年並み」、8月「やや高め」。
薩南沖合：4・5月「平年並み」、8月「やや高め」。
沖縄島南東：4月「やや低め」、6・8月「平年並み」。

(2) 表層塩分

山口県沖合：4・5月「やや低め」、6・8・9月「平年並み」。
山口県沿岸：4・5・6月「平年並み」、8月「やや高め」、9月「平年並み」。
対馬東水道：4・5・6月「平年並み」、7月「やや高め」、8・9月「平年並み」。
壱岐水道：4・6・8月「平年並み」。
五島西沖：4・6月「平年並み」、8月「やや高め」。
五島灘：4・6・8月「平年並み」。
天草西沖：4・5・6・8月「平年並み」。
西薩・甑沖：4・5・8月「平年並み」。
薩南沿岸：4・5・8月「平年並み」。
薩南沖合：4・5・8月「平年並み」。
沖縄島南東：4月「平年並み」、6月「やや高め」、8月「平年並み」。

3. 現況 (2007年10月上旬)

(1) 大陸棚上

海面水温は北部、南部ともに「はなはだ高め」。

(2) 黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「屋久島南付近での変動」。海面水温は「かなり高め」。

(3) 対馬暖流域

海面水温は「はなはだ高め」。

(註) 引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」： 約22年に1回程度の出現確率
「かなり」： 約7年に1回程度の出現確率
「やや」： 約3年に1回程度の出現確率
「平年並み」： 約2年に1回程度の出現確率

漁況予報

今後の見通し（2007年11月～2008年3月）

対象海域：東シナ海～日本海西南海域

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2007年級群（2007年生まれ））、1歳魚（2006年級群）、2歳魚（2005年級群）。魚の大きさは、あじ・さばは尾叉長、いわしは被鱗体長で表示。

1. マアジ

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は低調だった前年並みで、沿岸域の漁況は前年・平年を下回る。
- (3) 魚体：10～19cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）及び19～24cmの1歳魚（小銘柄）が主に、24cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

2. マサバ

- (1) 来遊量：前年並み。
- (2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年並みで、平年を上回る。
- (3) 魚体：25～28cmの0歳魚（豆銘柄）及び29～32cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される。

3. ゴマサバ

- (1) 来遊量：前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は前年を下回り、沿岸域の漁況は前年を下回り、平年並み。
- (3) 魚体：25～30cmの0歳魚（豆・小銘柄）及び29～33cmの1歳魚（小・中小銘柄）が主に漁獲される。1月以降には、沿岸域で33～40cmの2歳魚以上（中・大銘柄）が主に漁獲される。

4. マイワシ

- (1) 来遊量：前年・平年を上回る。
- (2) 漁期・漁場：漁期前半を主体に、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。
- (3) 魚体：15～21cmの0～2歳魚（中羽・大羽銘柄）が主に漁獲される。

5. ウルメイワシ

- (1) 来遊量：前年・平年を上回る。
- (2) 漁期・漁場：漁期前半を主体に、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。
- (3) 魚体：15～25cmの0～1歳魚（中羽・大羽銘柄）が主に漁獲される。

6. カタクチイワシ

- (1) 来遊量：前年並みで、平年を上回る。
- (2) 漁期・漁場：漁期は後半が主体で、漁場は沿岸域が中心となる。
- (3) 魚体：10cm程度の0歳魚（大羽銘柄）が主に、5cm程度の0歳魚（小羽銘柄）も漁獲される。

注：「前年」は2006年11月～2007年3月。「平年」は過去5年（2002～2006年）の平均値。

漁況の経過（2007年4月～8月）および今後の見通しについての説明

1. 資源状態

(1) マアジ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準にあったが、1980～1990年代前半に増加し、1993～1998年には近年では高い水準を維持した。1998～2000年の加入量減少のため資源は減少傾向を示したが、2001～2004年の加入量は1994～1997年の水準に回復し、2002～2004年には資源量も増加傾向を示した。しかし、2005年、2006年の加入量は低かったとみられ、資源量は2005年に引き続いて2006年も減少した。東シナ海・日本海（青森県～鹿児島県）での我が国のマアジ漁獲量は、1973～1976年には9～15万トンであったが、その後減少し、1980年に4万トンまで落ち込んだ。1980～1990年代は増加傾向を示し、1993～1998年には約20万トンを維持したが、1999～2002年には13～16万トンに減少した。2003年から漁獲量は再び増加し、2004年には19万トンであったが、2005年には14万トン、2006年は13万トンに減少した。

(2) マサバ対馬暖流系群

東シナ海・黄海・日本海に生息するマサバの資源量は、1970・80年代には比較的安定していたが、1992～1996年に増加傾向を示した後、1997年に急減し、1999～2006年は低い水準にある。東シナ海・黄海・日本海での我が国のマサバ漁獲量は、1970年代後半には27～30万トンであったが、その後減少し、1990～1992年には13～15万トンと大きく落ち込んだ。1993年以降、漁獲量は増加傾向を示し、1996年には41万トンに達したが、1997年には21万トンに大きく減少し、2000年にかけてさらに減少した。2000年以降、漁獲量は8～9万トンの低い水準で推移し、2006年は92千トンであった。

(3) ゴマサバ東シナ海系群

東シナ海から日本海西部に分布するゴマサバの資源量は、1992～2004年に比較的安定して同程度の水準を保っていたが、2005年以降は増加傾向を示している。東シナ海・日本海での我が国のゴマサバ漁獲量は、年変動はあるものの、1980年代以降およそ5万トン前後で推移していたが、2004年には31千トン、2005年には76千トンと、近年は変動がやや大きい。2006年の漁獲量は61千トンであった。

(4) マイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海においてマイワシは、1980年代後半から1990年代前半にかけて多く漁獲されたが、その後、急激に減少した。2001～2003年に漁獲量は1千トン程度で推移した。1999年には0歳魚がやや多く漁獲され、資源状態は低位ながらも一時上向いたが、その後は減少し、近年は極めて低位にある。海域によっては水揚量が前年を上回ることもあるが、全体として資源は低水準であるが、2004年以降の再生産成功率が良好であり、2007年級群は1990年代後半以降では加入量が多い。

(5) ウルメイワシ対馬暖流系群

1990年代以降では、2000年まで資源は漸減傾向にあったが、2001～2002年の加入量が以前よりも多かったため、一時的に資源は上向いた。2003年以降は再び漸減傾向で推移しているとみられる。2006年の春季に鹿児島県においてやや多くの水揚げがみられた。2006年級群は2005年級群と同程度、2007年級群は2006年級群を上回ると考えられる。

(6) カタクチイワシ対馬暖流系群

1990年代以降では、1995～1996年および1998～2000年にかけて資源は高水準で推移した。2001年の夏季までは沿岸域を中心に好漁が続いていたものの、2001年秋季から2003年春季までは加入量が少ない状態が続いていた。2003年秋季以降はやや好漁となっている海域が増えている。2005年および2006年とも1月以降に大羽イワシを主体に漁況が上向き、両年とも春季発生群の加入はやや良かった。2007年1月には大羽イワシの水揚げが過去最大となっており、引き続き2007年級群の加入も良い。

2. 漁況の経過

2007年4～8月の大中型まき網漁業の漁場は、対馬沖、五島西沖、東シナ海中部および東シナ海南部が中心であった。この間の大中型まき網漁船の九州主要港への水揚量は、全魚種合計3万3千トンで前年（2006年4～8月、3万6千トン）並みであった。マアジは9千トンで前年（1万8千トン）を下回り、さば類は1万5千トンで前年（9千トン）を上回った。

山口県～鹿児島県地先における沿岸漁業の漁況は、表1のような経過であった。マアジの漁獲量は、海域により差があるが、全体的には前年・平年並みであった。漁獲の主体は15～25cmの1歳魚であった。マサバは、海域によって差があるが、概ね前年・平年を上回った。漁獲の主体は30cm以下の0～1歳魚であった。ゴマサバは、好調であった前年を下回り、平年を上回った。32～38cmの2～3歳魚が主に漁獲され、7月以降は28cm以下の0歳魚も漁獲された。マイワシは、山口県を除く全県で前年を上回り、1997年以後、約10年ぶりの水揚量だった。漁獲の主体は16～20cmの1～3歳魚（2004～2006年級群）に5～15cmの0歳魚（2007年級群）が混じった。ウルメイワシは、山口県、福岡県および熊本県で前年を下回ったが、佐賀県、長崎県および鹿児島県で前年を大きく上回った。漁獲の主体は前半には16～23cmの1～2歳魚（2005～2006年級群）が主体で、後半には5～15cmの0歳魚（2007年級群）が混じった。カタクチイワシは、山口県、佐賀県で前年を下回り、福岡県、熊本県および鹿児島県で上回った。水揚げの主体を占める長崎県では前年並みだった。漁獲の主体は前半には9～15cmの1～2歳魚（2005～2006年級群）が主体で、後半には5～10cmの0歳魚（2007年級群）が主体であった。

3. 今後の見通しの説明

(1) マアジ

例年、11～3月期には0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）が漁獲の主体で、1歳魚（小銘柄）、2歳

魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。2006年級群は2005年級群と同程度の豊度と考えられる。2007年級群については、2007年2～4月に東シナ海南部～九州沿岸域で行った仔稚魚分布調査では、稚魚分布量は前年を下回った。一方、6月に東シナ海～山陰沿岸域で行った幼稚魚分布調査および8月に行なわれた計量魚群探知機を用いた分布調査の結果からは、2007年級群は2006年級群を上回る豊度と考えられた。これらから、0歳魚（2007年級群）および1歳魚（2006年級群）は前年並み、2歳魚（2005年級群）は前年より少なく、全体の来遊量は前年を下回ると見積もられる。

沖合域の漁況の指標となる大中型まき網のCPUE（1日1隻当り漁獲量）（参考図参照）は、近年比較的高い値で推移していたが、2005年以降は減少している。一方、沿岸域の漁況の指標となる代表的な沿岸漁業の漁獲量は2006年には増加した（参考図参照）。来遊量が前年を下回ることを反映して、沖合域の漁況は低調だった前年並みで、沿岸域の漁況は前年・平年を下回ると考えられる。

（2）マサバ

例年、11～3月期には0歳魚（豆銘柄）と1歳魚（小銘柄）が漁獲の主体となる。2005年級群の豊度は2004年級群より低く、2006年級群の豊度は2005年級群と同程度とみられる。2007年級群の評価は難しいが、漁況の経過から、2006年級群と同程度かやや高い豊度とみられる。これらから、0歳魚（2007年級群）は前年並みかやや上回り、1歳魚（2006年級群）は前年並みで、2歳魚（2005年級群）は前年を下回り、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

近年、沖合域・沿岸域ともに、漁況の指標は低い値で推移している。来遊量が前年並みであることを反映して、沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年並みで、平年を上回ると考えられる。

（3）ゴマサバ

例年、11～3月期には0歳魚（豆・小銘柄）と1歳魚（小・中小銘柄）が漁獲の主体となる。2005年級群の豊度は2004年級群より低く、2006年級群の豊度は2005年級群より低い。2007年級群の評価は難しいが、漁況の経過から、2006年級群より高い豊度とみられる。これらから、0歳魚（2007年級群）は前年を上回り、1歳魚（2006年級群）は前年を下回り、2歳魚（2005年級群）は前年を下回り、全体の来遊量は前年を下回ると考えられる。

来遊量が前年を下回ることを反映して、沖合域の漁況は前年を下回り、沿岸域の漁況は好調であった前年を下回り、平年並みと判断される。

（4）マイワシ

2001年に東シナ海、日本海における産卵調査の結果が過去最低となり、この頃の沿岸域におけるマイワシの水揚量は極端に低かった。ただし、2002年に沿岸域での漁獲量は底打ちとなり、その後は前年を上回る水揚量で推移してきたが、2000年以前に比べると依然として極めて低水準である。今後は、0歳魚の加入量によって来遊水準が決まると考えられる。

が、2007年級群は近年の中では加入量が多い。

(5) ウルメイワシ

2001～2002年に当歳魚の加入がやや良く、来遊水準は一時上向いたものの、その後は漸減傾向が続いている。2007年夏季に行った計量魚群探知機調査では、前年を大きく上回った。2006年春季に鹿児島県で1～2歳魚主体の漁模様が良かったが、2006年11月以降は前年並みで経過した。2007年の4～8月における各県の水揚量は前年を大きく上回り、2007年級群は2006年級群より良かったと考えられる。

(6) カタクチイワシ

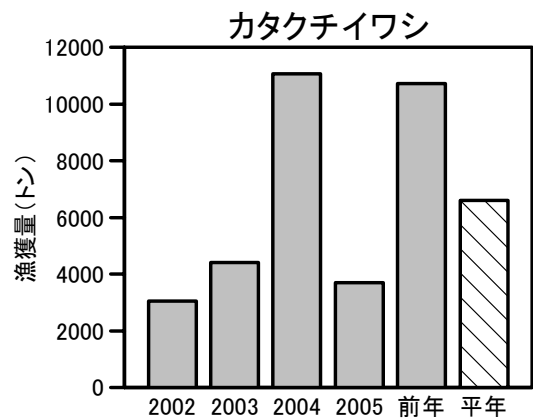
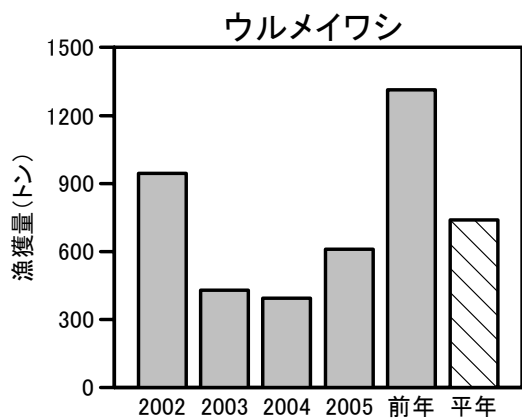
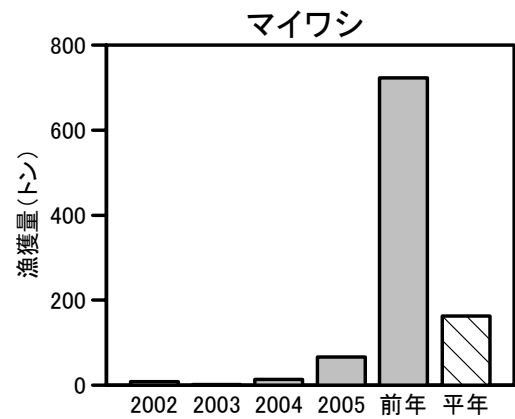
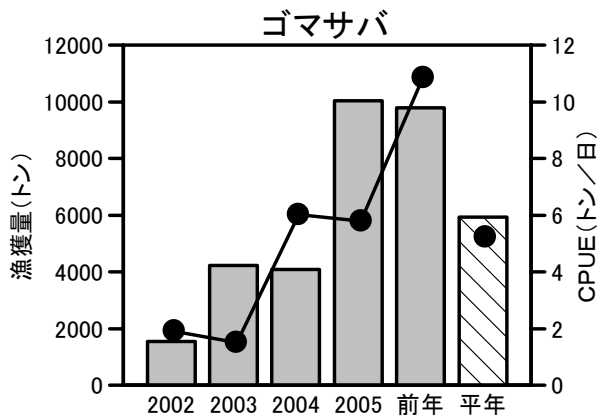
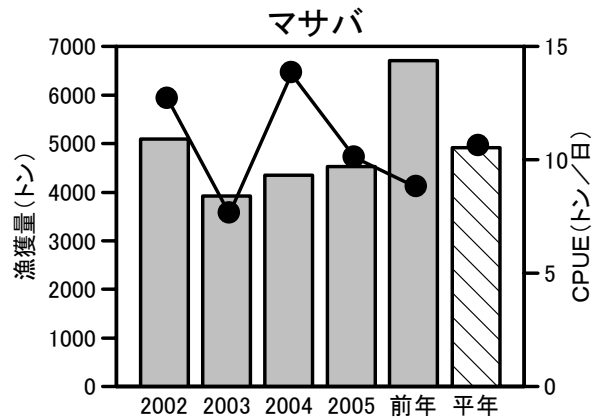
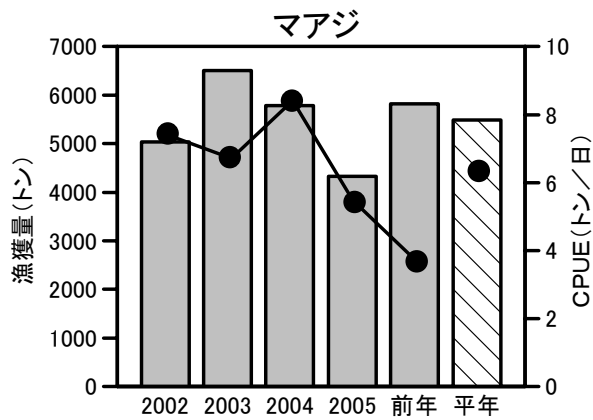
2005、2006年の1～3月に大羽イワシの来遊が多く、そのため両年の春季発生群の加入はやや良かった。2007年夏季に行った計量魚群探知機調査では、前年を大きく上回っている。また、4～8月の来遊水準は、11月以降の来遊水準と正の相関を持つこと、および五島灘の2月下旬の水温偏差と4月以降の来遊水準が負の相関を持つ。2007年1月に大羽イワシが九州西岸に多く来遊した。このため4月以降の加入が期待されたが、前年を上回る加入とはならなかったものの、加入状況は良好である。

表 1. 沿岸域の漁況経過 (2007 年 4~8 月、一部 9 月を含む)

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
山口	<p>中型まき網で 2,002 トンの水揚げがあり、前年比 88%、平年比 109%と平年並みであった。湊地区の浮敷網（棒受網、すくい網）では、ゼンゴが 6 月を中心に 5 トン水揚げされ、前年比 465%、平年比 59%と前年を上回り、平年を下回った。江崎地区の小型まき網では 8 月にマメアジが 0.32 トン水揚げされ、前年比 8%、平年比 4%と前年・平年を大幅に下回った。</p>	<p>中型まき網で 741 トンの水揚げがあり、前年比 4,698%、平年比 548%で前年・平年を大幅に上回った。湊地区の浮敷網では 0.28 トン水揚げされ、前年比 1%、平年比 1%と大幅に下回った。江崎地区では 0.2 トンで全く水揚げされなかった昨年を上回ったものの平年比 9%であった。</p>	
福岡	<p>代表港まき網漁獲量は 1,021 トンで前年比 106%、平年比 104%と平年並み。マメ銘柄やや好漁。棒受網は 72 トンで前年比 37%、平年比 45%と不漁。銘柄はゼンゴが主体であった。</p>	<p>代表港まき網漁獲量は 510 トンで前年比 187%、平年比 331%と好漁。銘柄は中・小が中心。棒受網での漁獲量は 4 トンで前年比 335%、平年比 619%。まき網同様、小銘柄の漁獲が多かった。</p>	<p>代表港まき網の漁獲量は 242 トンで、前年比 1,489%、平年比 2,579%と好漁であった。</p>
佐賀	<p>前年・平年を下回った。(前年比 64.7%、平年比 56.7%)</p>	<p>前年を下回り、平年を上回った。(前年比 68.7%、平年比 130.9%)</p>	
長崎	<p>地域により差があるが、概ね前年を上回り、平年並みであった。(前年比 122%、平年比 103%)</p>	<p>地域により差があるが、概ね前年並みで、平年を上回った。(前年比 116%、平年比 161%)</p>	
熊本 牛深港	<p>75.8 トンの水揚げがあり、前年比 96.7%、平年比 40.6%で、前年並みで、平年を下回った。</p>	<p>271.1 トンの水揚げがあり、前年比 77.6%、平年比 93.1%で、前年を下回り、平年並みであった。</p>	
鹿児島	<p>期間中、豆・小・中アジ(2006 年級群)及び中アジ(2005 年級群)主体で、6 月以降はアジ仔(2007 年級群)が加入した。期間中合計で、731 トンの水揚げで、前年・平年を下回り、非常に低調に推移した。(前年比 69%、平年比 40%)</p>		<p>4~7 月は中小・中(2005・2004 年級群)主体の漁獲で、8 月以降は豆・小(2007 年級群)が加入し漁獲の主体となった。4~6 月は好調であった前年を下回り、平年を上回った。7~9 月は前年・平年を下回って推移した。期間中合計で、8,748 トンの水揚げで、前年を下回り、平年並みであった。(前年比 67%、平年比 114%)</p>

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
山口	<p>中型まき網での水揚量は6月を中心に18トンで、前年比461%、平年比190%と前年・平年を上回った。湊地区では浮敷網で7、8月にヒラゴが0.06トン水揚げされたのみで、前年比0.1%、平年比0.3%と前年・平年を大幅に下回った。江崎地区では全く水揚げがなかった。</p>	<p>湊地区の浮敷網の水揚量は55トンで、前年比36%、平年比25%と前年・前年を下回った。江崎地区では本年は全く水揚げされなかった。</p>	<p>湊地区の浮敷網の水揚量は1,655トンで、前年比89%、平年比116%と豊漁だった前年を下回り平年並みとなった。今期は7、8月の大羽銘柄の水揚げが顕著で、同銘柄水揚量は725トン、過去44年の統計史上最高を記録・更新中である。江崎地区では6～8月にすくい網、小型まき網で81トンが水揚げされ、前年比53%、平年比53%と前年・平年を下回った。</p>
福岡	<p>代表港まき網の漁獲量は49トンで前年比205%、平年比281%であった。棒受網では7～8月にまとまった漁獲があり、漁獲量は98トンで、前年の3トンを大きく上回った。沿岸の小型定置網ではほとんど漁獲されなかった。</p>	<p>代表港まき網の漁獲量は101トンで前年比41%、平年比72%とやや不漁であった。一方、棒受網漁獲量は16トンで、平年比299%であった。</p>	<p>棒受網の漁獲量は161トンで、前年比42%、平年比152%とやや好漁であった。</p>
佐賀	<p>水揚げは7、8月にみられたのみであった。(平年比573.7%)</p>	<p>水揚げは5月まではほとんどなかったが、6月中旬からみられはじめ、7、8月は多かった。(前年比711.5%、平年比240.9%)</p>	<p>前年・平年を下回った。(前年比53.8%、平年比55.2%)</p>
長崎	<p>一部の地域では若干の漁獲も見られたが、前年同様、低調に推移した。</p>	<p>前年・平年を上回った。(前年比158%、平年比241%)</p>	<p>地域により差があるが、概ね前年・平年並みであった。(前年比95%、平年比97%)</p>
熊本 牛深港	<p>298.2トンの水揚げがあり、前年比8,200.9%、平年比3,577.2%で、前年・平年を大幅に上回った。</p>	<p>365.5トンの水揚げがあり、前年比47.8%、平年比67.6%で、前年・平年を下回った。</p>	<p>1,129.7トンの水揚げがあり、前年比365.6%、平年比116.3%で、前年を上回り、平年並みであった。</p>
鹿児島	<p>期間中、まき網では大中羽銘柄(2005年級群)主体に1,856.8トンの水揚げで、前年比178.025%、平年比69,637%となった。北薩海域の棒受網では小中羽銘柄(2007年級群)主体に87.8トンの水揚げがあり、前年比4,477%、平年比3,963%となった。</p>	<p>まき網では期間の前半は大羽銘柄(2006年級群)主体に、期間の後半は小中羽銘柄(2007年級群)主体に3,121トンの水揚げがあり、前年比255%、平年比493%となった。棒受網では小中羽(2007年級群)主体に959トンの水揚げで、前年比163%、平年比137%となった。</p>	<p>期間中、まき網では大中羽銘柄(2007・2006年級群)主体に969トンの水揚げで、前年比312%、平年比267%となった。棒受網では大中羽銘柄(2007・2006年級群)主体に667トンの水揚げで、前年比189%、平年比176%となった。</p>

注：「前年」は2006年4～8月、「平年」は過去5年の平均値。



今後の見通し参考図

沿岸漁業の漁獲量（沿岸漁況の指標の一つ；棒グラフ）と大中型まき網の1日当たりの漁獲量（沖合漁況の指標の一つ；折れ線グラフ、CPUE）。沿岸漁業の漁獲量は、マサバは山口県～熊本県（ゴマサバを含むが主にマサバ）、ゴマサバは鹿児島県（マサバを含むが主にゴマサバ）、その他は山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。11月～翌年3月。平年は過去5年平均。

参 画 機 関

山口県水産研究センター	沖縄県水産海洋研究センター
福岡県水産海洋技術センター	社団法人 漁業情報サービスセンター
佐賀県玄海水産振興センター	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
長崎県総合水産試験場	独立行政法人 水産総合研究センター 西海区水産研究所
熊本県水産研究センター	
鹿児島県水産技術開発センター	